



春の花嫁

2010.04.11

恋をした 乙女が おりました。

来る日も 来る日も
彼がやってくるのを、待ち望んでいました。

けれども、いくら 待っていても、彼は やってきません。

ねえねえ、椿さん。
彼は、まだかしら？

乙女は、椿に 尋ねました。

まだだねえ。
もう少し、お待ちなさいよ。

椿は、首を振りました。

乙女は、熱い胸を焦がしながら、もう少し、待ちました。

ある日、梅の木が 蕾をつけました。

ねえねえ、梅さん？
わたし、どうしても 彼に 会いたいの。

乙女は、背伸びしながら 梅の蕾に 訴えました。

彼？
彼なら、もうすぐ やってくるよ。

梅の蕾は、にっこりと 笑いました。

ほんと？

どこ？

どこで待っていたら、彼に いちばんに 会えるかしら？

梅の蕾は、くすりと 笑いました。

そうだねえ。

色とりどりの花が 咲くところ。

ピンク、黄色、青、赤、紫・・・

いろんな花が いっぺんに咲いたら、
そこが 彼を迎えるゲートになるんだよ。

彼は、必ず そこを通るから、
いろんな色の花が咲くところで 待っていたら、いいよ。

梅の蕾は それだけ言うと、
小さなあくびをして、こくり、と 眠ってしまいました。

乙女は、村中を 歩き回って、
いろとりどりの花が咲くところを 探しました。

花が咲いてからでは、遅いのです。

けれども、花が咲く前に いろとりどりの花が咲く場所を 見つけるのは、
思った以上に 難しいことでした。

早く、早くしなければ、
彼が ゲートを 通ってしまう！

乙女は、毎日、いろとりどりの花が咲く場所を 探して 歩きました。

ある夕方、細い足が 歩みを止めると、
乙女は とうとう 野原に 倒れこんでしまいました。

その晩は、とても 冷え込みました。

もう 春は すぐそこまで 来ている、というのに、
この地方では、この時期、必ず 一度は 小雪が舞う寒さとなるのです。

乙女は、野原に 倒れたまま、動けません。

冷たい雨が 降り始めました。

大きな雨粒たちが、乙女の耳元で
「早く おうちへお帰りなさい！」と 代わる代わる 叫びましたが、
乙女の瞼が ピクリとするだけでした。

しのつく雨は、乙女の姿を隠すまでとなり、
そのまま 夜は更けていきました。

翌朝、姿をあらわした おひさまは、
もう すっかり 春の装いでした。

おや？
こんなところに……

おひさまは、首をかしげました。

きのうまでは、こんな花、咲いていなかったはずなのに。

いぶかる おひさまの視線の先には、
ポピーが一輪、咲いていました。

小さく、はかなげな、しかし 虹色に輝くポピーが一輪、
一生懸命に 根を張り、咲いていました。

それは、ゆうべ、乙女が倒れた場所でした。
雨が 乙女を濡らし、沈めるかのように隠した
場所でした。

そのとき。

チリン、と どこかで 鈴の音がしました。

野原に生きている すべての花が、一斉に 咲き始めました。

ピンク、黄色、青、赤、紫、白、青、橙……

いろとりどりの花たちが、
示し合わせたかのように、いっぺんに 咲き始めました。

いえ。
花たちは、示し合わせたのです。

なぜなら、春が やってきたから。

そして、今日は……

春の婚礼の日だから。

花たちは、いつもの年以上に、豪華に 咲き乱れました。

そして、タキシードを着た風たちの誘いによって、
優雅に、煌びやかに 踊りました。

春が、やってきました。

春は、堂々と やってきました。

春は、静かに やってきました。

春は、微笑みながら やってきました。

春は…

春は、ゲートの前で立ち止まると 一礼し、
花嫁に、そっと 手を差し伸べました。

サワサワと音がして、
周りの木々が、一斉に 拍手をしました。

キラキラと輝く 花たちの笑い声と
ヒューヒューという 風たちの口笛が、
春の婚礼を 祝福しました。

婚礼とはいえ、
あまり ゆっくりしているわけにもいきません。

なにしろ、世界中が、
春を、いまかいまかと 心待ちにしているのですから。

春は、花嫁の手をとり、
花や風たちの祝福を受けながら、
春のために用意されたゲートを くぐりぬけました。

野原では、花や草木や虫たちの大歓声が 湧き起こっていました。

おひさまが、大きなあくびを ひとつ すると、
騒ぎ疲れた花や風たちにも
次から次へと あくびが 伝染してゆきました。

野原に、いつもの静けさが 戻ってきました。

春が ゲートを通りすぎた後、
虹色のポピーの姿を見かけた者は 誰もおりませんでした。

春の花嫁は、春とともに、旅立ったのでした。